

## 名詞句における後置修飾のVing形について

著者	小川 明
雑誌名	東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学
巻	33
ページ	155-163
発行年	1993
出版者	東京家政大学
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1653/00008877/">http://id.nii.ac.jp/1653/00008877/</a>

## 名詞句における後置修飾のVing形について

小川 明

(平成4年10月1日受理)

### The Postmodifying *Ving* in Noun Phrases

Akira OGAWA

(Received October 1, 1992)

1. この小論では、次のような後置修飾のVing形を含む文について検討をしてみたい。

- (1)a. That is to say, the construction in example 145 corresponds to a roughly synonymous construction *having* the form of a relative clause. (Meyer, *Apposition in contemporary English*)
- b. Restrictive appositions *containing* units lacking determiners. (ibid.)
- c. Table 3.12 details the frequency of restrictive and nonrestrictive occurrences of appositions *consisting* of the obligatory markers of appositions *of*, *such as*, and *like*. (ibid.)
- d. The assignment of the values is based on empirical evidence *coming* from the result of certain tests. (Giorgi and Longobardi, *The syntax and noun phrases*)
- e. We are now in a position to consider the most abstract consequences *following* from our parametric hypothesis (ibid.)
- f. Generalization covering so vast a field must be made with proper reserve. (井上その他 (1985) )
- g. A person *having had* dealings with him will never forget him. (ibid.)
- h. These are phenomena *pertaining* to the possible confluences of meaning elements

within English verbs, motivated by the cognitive content of the notion "direct causation."

(Pinker, *Learnability and cognition*)

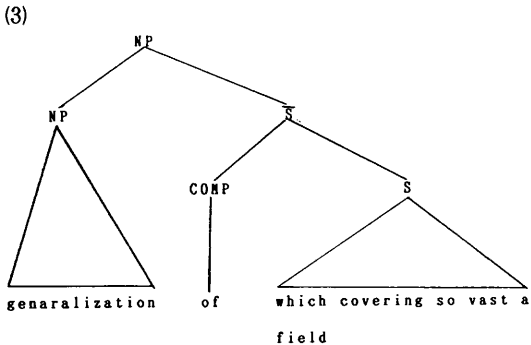
- i. Intuitively, the rules *governing* stem-sharing reflect how much the language lets you bend or enrich a verb's meaning before it has to be treated as a completely different verb. (ibid.)
- j. Participles *functioning* as adjectival clauses.
- k. Politicians *visiting* their constituency twice every election period do not do their job properly. (Kortman, *Free adjuncts and absolutes in English*)

この種の文は今まであまり論じられることがなかったように思われる。ただ井上その他 (1985: 394-9) ははやまとまってこれについて考察をしている。そこでは、3つの特性が挙げられている。(i) Vingが進行形のVingではない。(ii) Ving以下は先行するNPを限定修飾している。(iii) Ving以下の表現の主語が常に欠落していて、その欠落部は先行するNPで補うことができる。この種の構文を生成するのに、彼らは次のような提案をしている。(ii) からVing以下は関係詞節である可能性が最も高い。事実このような表現の多くは、関係詞節縮約変形により説明されてきた。このように考えると、関係詞が存在するが、音形を持って実現することはない。その関係詞は、Wh移動によってCOMPに移動

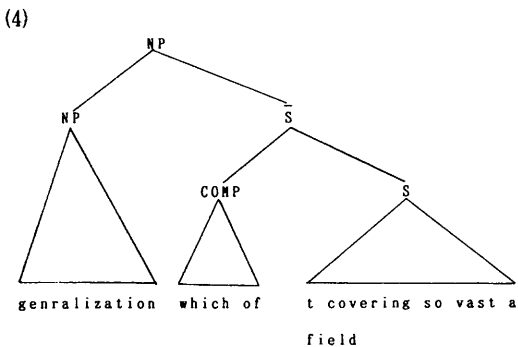
するのであるから、COMPも存在していなくてはならない。しかしそれは音形を持って実現することはない。関係詞の欠落部は常に主語であるが、この欠落部は常に関係詞がCOMPに移動した後に残された痕跡とする必要がある。なぜならば関係詞節は関係詞の痕跡である欠落部を必ずひとつ持たなければならないからである。そしてこの欠落部が常に主語であることを説明するために次の特殊な条件を設定する。

(2) ING関係詞節の主語は関係詞の痕跡でなければならない。

COMPには補文標識に近い前置詞 of を選ぶと、(If) における generalization covering so vast a field の元の構造は次のようになる。



これにWh移動が適用されて次になる。



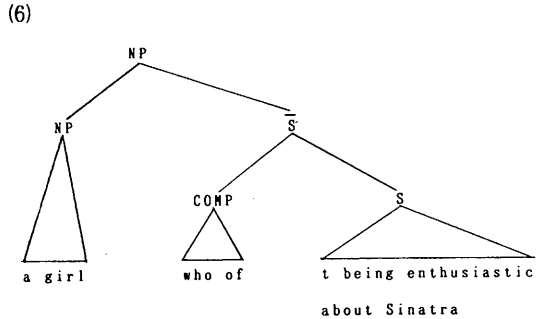
そして which, of が削除される。

この分析は従来関係詞節縮約変形によって説明されていた次のような文にも拡張される。

(5)a. He married a girl (who is) from Texas.

- b. The man (who is) entering the room right now is a spy.
- c. John met a girl (who was) enthusiastic about Sinatra.

たとえば、(c)は、



から派生される。ここでは、常にbeingが存在していることが前のものと違っているだけである。そしてbeingを削除する規則はどのみち他でも必要であって独立した根拠がある。付帯状況のwith構文、分詞構文においてもbeingが削除されることが観察される。以下\_\_\_は削除が生じる場所を示すことにする。

- (7)a. But as it was, with no reason \_\_\_ given, no such inquiry was impossible.
- b. With the University match \_\_\_ only a little more than a fortnight ahead, there is a growing interest in the teams.
- c. In August, brief summer \_\_\_ over, the deer turn east.
- d. He was almost asleep, \_\_\_ worn out by the strain.

2. 以上を土台にして先に進むことにしよう。(ii)が示すように、Vingは先行するNPを限定修飾するのであるが、先行するNPを限定修飾するものは、(1)と(5)以外に他にもある。これを視野に入れて、大きい枠組みで考える必要があるのではないか。先行するNPを限定修飾するものは大きく2つに分けることができる。関係代名詞を使うものと使わないものとのである。関係代名詞を使わないで済ませるのがよく知られているように主として目的語の場合である。また補語もできる。

(8)a. Is this the book you want to read?

b. He was not the fine gentleman I thought

それに対して、主語の場合は次のような例をのぞくと普通できない。

(9)a. I talked to the doctor \_\_\_ many of us believe is a spy.

b. The America that is depicted there is the country \_\_\_ the American English teachers wish existed. (長原 (1990: 47-8))

ここでは関係詞はisおよびexistedの主語であるにもかかわらず省略されている。このように、主語であるからと云ってすべて省略が不可能であるわけではない。以上をまとめると次のように云うことができる。

(10) 省略は直後に関係詞節の主語の名詞句がある場合に許される (長原 (1990: 47))

しかしここでは目的語および補語の関係代名詞は省略できるが、主語の関係代名詞はできないと、簡略化していることにする。そうすると、目的語および補語の関係代名詞なしの構文は存在しているのに対し主語の関係代名詞なしの構文がギャップになっていると云うことができる。その間隙を埋める別の形のものが存在する。本稿で対象にしている種類の文(1)や、いわゆる過去に於いて関係詞節縮約規則で説明されていた(5)の文である。目的語と補語の関係詞の省略されたものと、(1)と(5)は、どちらも関係代名詞を使わないで済ますという共通点を持っている。このように考えるとまったく結び付けられたことがなかった目的語省略と、(もし存在するとすれば)関係詞節縮約規則とが類似した機能を持っていることがわかる。

関係代名詞省略の場合は定形動詞が生じる。それに対して、ここで対象にしている構文においては定形の動詞は存在しない。すでに触れたように英語では主語を明示しない定形動詞を持つ関係節は原則として存在しないのであるが、なぜ主語の関係代名詞省略は英語においてはなのだろうか。次の文においては、あるべき主語の関係代名詞が省略されてしまっているが、これを考察してみよう。

(11)a. The candidate \_\_\_ has passed his examinations must apply to the Master of the Rolls for admission.

b. The mists \_\_\_ sometimes cover the top of the island obscured the light when it was most needed.

たちまち構造が把握できなくなってしまうのである。なぜか。これは名詞句と定形動詞がこの順序で存在すると、主語とその動詞とみなしてしまう操作がすぐなされるからであろう。長原(1990: 48)は、上記の制限(10)について「背景には、関係詞の省略により主要部と関係詞の動詞が続くことで誤ってそれを主節の主語と動詞と解釈する危険をなくすという言語運用(performance)上の動機付けがある」と述べる。さらにそのような誤った解釈の危険性がないと思われる環境では、その制限に反した例が存在することを指摘する。

(12) I'm the first one \_\_\_ saw her.

このことから、(10)「に類するものは文法の規則として存在せず、関係詞を省略した形としない形の両方が可能であって、片方に誤解の可能性がある場合にははっきりと表現するためにエネルギーを使うのが丁寧な言葉使いであるという語用論的な原則があると考えた方がよいようである」とする。

つまり、主語の関係詞が一般に省略できないそのギャップを埋める形で(1)、(5)で示される文が存在しているのである。定形動詞が使われないことが重要である。それゆえ構造の把握が不可能にならない。ただし-ed形については、定形動詞と同一のため英語学習上、学生にとって困難を引き起こす。これについては宮下(1985: 26-7)が指摘している。

学生の第4の関門は名詞に後続する分詞です。英語では、現在分詞や過去分詞に率られた句が名詞に後続して、名詞が表わす事物の複雑なあり方などを説明することが頻繁に行なわれます。特に動詞の原形に-edが付いた形の過去分詞は、動詞の過去形と形が全く同じなので述語と紛はしく、学生達を悩ませます。これを過去を表わす動詞と取るとその前の名詞は主語と云うことになってしま

い、主語・述語の関係が狂ってしまいます。ですから-ed形の動詞が出て来たら、それが(一)過去を表わす述語動詞であるのか、(二)助動詞beに伴って受身を表わし述部を成すのか、(三)助動詞haveに伴って完了を表わし述部を成すのか、それとも(四)直前の名詞の対象の受身又は完了を表わすのか、又は(五)受身又は完了の結果の状態ないし性質を表わすのかを、学生達に繰返し確かめさせねばなりません。

このことは私自身も教室で経験することであり、正しい指摘と思う。そして英語教育上の研究においても、このことはひとつのトピックを形成しているように思われる。たとえばYoshimi (1989) など。

ただしその他の形については困難を呈しない。なぜか、定形動詞と決してまちがわれぬからである。定形文であるとすればかならずbe動詞が付随する。このことが多分これらの構文を説明するのにwh beを削除する関係詞節縮約規則が仮定された理由であろう。

3. それではなぜこの構文が存在するのであろうか。ギャップを埋めるという機能を持つことはすでに示した通りである。なぜそのギャップは埋めなければならないのであろうか。言語の普遍性の視点から眺めて見よう。山本(1992)によってComrie (1989)の論じる関係詞節形成の階層性についてまとめてみる。関係詞節化の対象になる要素はさまざまな文法関係を持つ。例えば、The man that I brought yesterday was interesting.で関係詞節化の対象になっているのは、broughtの直接目的語である。たくさんの方の言語を調べてみると、関係詞節化の対象になりやすいものとなりにくいものがあり、次のような階層をなす。

(13) 主語 >直接目的語 >非直接目的語 >属格

上位のものほど関係詞節化の対象になりやすく、下位のものほどなりにくい。ある言語に非直接目的語の関係詞節化があれば、主語と直接目的語の関係詞節化は存在すると予測できる。

また関係詞節の形成法には4つのタイプがある。

- (1) 関係詞節化された主要部が、関係詞節内にそのまま完全なかたちで現われる。
- (2) 主要部が代名詞の形でのこる。

- (3) 主要部を関係代名詞に変えて節の頭に移動させる。
- (4) 関係詞節内で主要部の役割を顕在的に示すものがない。

これらの4つのタイプは関係詞節内で、関係詞節化された主要部がより明示的なものから非明示的なタイプの順序になっている。多くの言語が関係詞節の形成法を複数持っている。その形成法同志の分布は法則性が見られる。それぞれの形成法は、(13)の階層において、上位ではより非明示的なタイプが使われ、下位に行くに従ってより明示的なタイプが使われる。より明示的なタイプを+で、より非明示的なタイプを\*で表わすと次のようになる。

	主語	直接目的語	非直接目的語	属格
トルコ語	*	*	*	+
ウェールズ語	*	*	+	+
ヘブライ語	*	*・+	+	+
アオバ語	*	+	+	+

これには機能的な観点から説明が与えられる。関係詞節化が困難な位置ほど、より明示的なタイプを利用することによって情報の復元ないしは意味処理を容易にしていると考えられる。

さて英語でも、より明示的なタイプ(3)とより非明示的なタイプ(4)が存在する。もし上で述べられたことが正しければ、英語では非明示的な主語を持つ関係詞節つまりタイプ(4)が存在しなくてはならないことになるだろう。なぜなら非明示的な直接目的語の関係詞節(タイプ(4))が存在するから、(13)においてそれよりハイアラーキが上の主語の場合も非明示的な関係詞節(あるいはそれに対応するもの)が存在するはずである。一方既に述べたように、英語の構造上の要請から、そのような構文は存在しえないのである。非明示的な主語にもかかわらず構造上の混乱を生まないという条件を充たすものがまさにこの構文なのである。

4. それではこの構文はどういう構造を持っているのであろうか。井上その他(1985)は既に述べたように、関係詞節の一種と見做した。そのためにやや特殊な制限(2)を仮定しなければならなかった。従来の関係詞節縮約規則が疑問視される一番大きい理由は(1)におけるように、進行形にならない動詞でも生じることであ

た、しかし(1)と(5)はどちらも同一の規則で説明されなければならないのだろうか。wh beが存在しない形のものから関係代名詞のない形をつくるわけにいかない、それを埋めるのがここで問題にしている構文である。これは別の規則で説明してはいけないのだろうか。このことはひとつの問題を提起する。関係詞節縮約規則とは別のもうひとつの規則を仮定して二つの規則でまかなうべきか、ひとつの規則ですべて説明すべきか。簡潔さという基準でいえば、ただひとつの規則で説明することの方がすぐれている。しかしほんとうに簡潔さということだけで決めることができるのか。複雑な説明のほうがより忠実に経験的事実を反映することがないだろうか。異なった過程を経たものがひとつの機能をはたしていることがないだろうか。たとえば原口・鷲尾(1988:179)が指摘するように、述語名詞句を含む非制限的關係詞節の場合には関係詞節縮約が、

(14) John, (who was) a good salesman, charmed them immediately.

のように可能であるが制限的關係詞節の場合には不可能である。

- (15) a. I know a man who is a chemist.  
 b. \*I know a man a chemist.

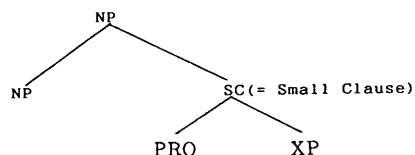
しかしこの非文の穴を埋める表現が存在する。

(16) I know a man as a chemist.

後置修飾要素はさまざまな過程を経て実現される可能性がありそうである。単純にはいかないのではないか。関係詞節縮約の規則についても多くの場合は成り立っているという事実をみすごしてはいけないのではないかと思う。実際の言語現象は一筋縄でいなくて、いわばモザイク模様をなしているのではないか。

以上のことを念頭におくが、ここではまず(1)と(5)のどちらもひとつの規則で説明する試みをしてみたい。どちらも次のような(17)の構造を仮定してみる。後置修飾要素は小節と考えてみたい。小節はNP XPの形を持ち、NPとXPの間に主語-述語関係が感じられ、「節」に似ているが時制文と異なり時制も相も含まない

(17)



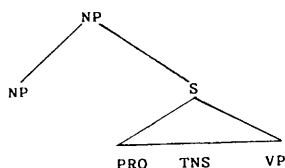
構成素と考えられている。しかし厳密な定義は問わないことにする。ここではNPの位置にPROが生じていて、常にこの小節の主語が目に見えないことである。そしてこのPROは先行するNPと同一指示である。

具体的には(If)および(5c)はそれぞれ次のような構造を持つことになる。

- (18) a. [ [Generalization]<sub>NP</sub> [PRO [covering so vast a field]<sub>VP</sub> ]<sub>SC</sub> ]<sub>NP</sub>  
 b. [ [a girl]<sub>NP</sub> [PRO [enthusiastic about Sinatra]<sub>AP</sub> ]<sub>SC</sub> ]<sub>NP</sub>

なお井上その他(1985:398-9)は(3)の代案として次のような構造も考えている。これは本稿の提案とPROを含む点でやや似ている。

(19)



5. ここで対象にしている名詞句の後置修飾要素と表面上同じ連鎖はさまざまな所で現われる。まず特定の動詞の後、feel, find, get, have, hold, keep, make, see, wantなどの後では同一の連鎖が現われる。

- (20) a. John has *the water running in the bathtub*.  
 b. I have *a book being reviewed by Dwight MacDonald*.  
 c. I'm having *a new house built*.  
 d. The cook had *the water hot in a jiffy*.  
 e. He has *his eldest son in boarding school*.  
 f. Happy is when no one *has the television*.

- (21) a. *He got his shoes and socks wet.*  
 b. *Can you easily make yourself understood in English ?*  
 c. *I saw something moving.*  
 d. *I saw a police car parked across the way.*  
 e. *Help! I don't want a drunk getting sick.*

付帯状況のwithと共に現われる。

- (22) a. *We stayed in bed with the fire roaring in the bed....*  
 b. *The streets of the town were deserted, clean, smelling of the fields, hay-carts, and primroses, with the darkness broken by dim lamps and a slender moon.*  
 c. *With Emil afraid of snakes, you shouldn't take him along.*

分詞構文にも見いだされる。

- (23) a. *Other men were passing, their tread softly rhythmic in the settled dust.*  
 b. *Dinner finished, we left for the opera.*  
 c. *The train moved off and she sat there, her eyes bright and shinning, her little body stiff and resolute.*

そして分詞構文の場合には、小節の主語が表面的にはなくてPROと考えられる時がある。

- (24) a. *Walking on tiptoe, I approached the little window.*  
 b. *Left to itself, the baby began to cry.*  
 c. *Automatically calm, she sat by the bedside.*

主語の位置にも見いだされる。

- (25) a. *Workers angry about the pay is a situ-*

ation to avoid.

- b. *Everybody yelling about taxes is an interesting development.*

これらは、表面的には同一の連鎖であるが、構造的には異なっている。(20)～(25)の例はすべてNP XPにおいてNPが主語で、XPが述語の働きをしている。NPは代名詞でも固有名詞であってもかまわない。これ全体がひとつの構成素をなして、(24)が示すように常に単数扱いである。ところが本稿で対象にしている例では、XPはNPを後置修飾していて、数はNPの数か決定する。NPが単数なら単数扱いになり、複数なら複数扱いになる。もちろんNPは代名詞や固有名詞であってはならない。また(21a)のようにXPが単独の要素の場合にはhis wet shoes and socksのように前置されなければならない。しかしながらXPの意味上の主語は前のNPである。このことは、

- (26) a. [ NP [ PRO XP ]<sub>sc</sub> ]<sub>NP</sub> (後置修飾)  
 b. [ NP XP ]<sub>sc</sub> (その他)

の対比によりうまく説明できる。PROは見えないのであるから、ただの小節と後置修飾の小節が表面上NP XPの同一の連鎖になってしまうことが説明できる。

6. 以下、この分析を仮定するとうまく説明がつく事実を挙げてみたい。XPの時制についてはあいまいである。なぜなら小節の基本的な特長は時制を持たないからである。実際、後置修飾については時制はあいまいである。Quirk et al. (1972: 876)によれば、次の(27a)にたいして、(27b)のどの形でも対応できるという。

- (27) a. *The man writing the obituary is my friend.*  
 b. *The man who*
- |            |   |            |
|------------|---|------------|
| will       | } | write      |
| writes     |   | be writing |
| is writing | } |            |
| wrote      |   |            |
| was writi  |   |            |

the obituary is my friend.

そしてこのようなあいまいさは分詞構文にもあらわれる。時制は主節の時制と脱み合わせながら決定しなければならない。独立して時制を持っている訳ではないのである。

- (28) a. Being ill (= As I was ill), I stayed at home.  
 b. Being ill (= As he is ill), he cannot come.  
 c. Turning to the right (= If you turn to the right), you will find the school.  
 d. The train starts at six, arriving (= and it will arrive) there at seven.

受動態については、完了形とそうでないかが明示されない場合がある。

- (29) a. He gave me a letter written by his father. (= He gave me a letter that had been written by his father).  
 b. The books published by his company sell very well. (= The books that are published by his company sell very well). (Haan (1989: 64))

分詞構文でもbeing+Venとhaving been+Venの場合、being, having beenが省かれることがあり、完了形とそうでない場合が同じ形になってしまうことがある。

- (30) a. (Being) written in an easy style, the book is adapted for beginners.  
 b. (Having been) defeated on the Western Front, Germany applied to the Pope for the mediation. (井上その他)

また次のようにbeenによって完了を表わすことはできない。

- (31) \* He gave me a letter been written by his father.

進行形であってもそうでなくても、どちらもVing形で示される。これは後置修飾の場合も分詞構文などの場合もまったく同じである。

- (32) a. Arriving (= When he arrived) at the station, he found his train gone.  
 b. Walking (= While I was walking) along the street, I met an old friend of mine.

ただしやや異なる点もある。beingについては、それを伴うのと伴わないのでは後置修飾の場合、意味的に異なる。

- (33) The existence of an espionage organisation in touch with the work (being) done at Godley's had been confirmed.

(Haan (1989: 73))

beingが存在すると進行形の意味になる (cf, Haan (1989: 73)). この差は分詞構文では見られないようである。任意であって、違う差が見られる。分詞構文が理由の意味を持つときは、beingが生じる。

asは顕在化したPROと考えられる。このasは任意の要素であって、なくてもよい。

- (34) a. the phrasal construction cannot be used, even though the condition as stated is met.  
 b. Degrees of objecthood and subjecthood are related, I think, to the concept of clausiness as explored in recent work by Ross.  
 c. America as seen by Japanese  
 d. man as different from animals

後置修飾以外の場合は[NP XP]のXPのところ generally にNPが生じることが可能である。

- (35) a. The army will have you a soldier in the two months.  
 b. A good purpose makes hard work a



*pleasure.*

- c. With your son *a student*, you probably don't see so much of him.
- d. Moses Malone *an invalid* is the last thing the Bullets need.

それに対して非制限用法の後置修飾の場合にはできない。その代わりにNP *as NP*の形が使われる。

- (36) a. Adjectives as heads.
- b. The genitive as a noun.
- c. *You, we* and *they* as indefinite pronouns

さらに*as*がPROと類似した他の要素を指示する役割を持つのではないかと思わせる事実が存在する。*as*がいわゆる関係代名詞として使われる用法である。

- (37) a. He is a teacher, *as* became clear from his manner.
- b. *As* was expected, he performed the task with success.

*as*についての細かなところは他の所で検討したいがこの*as*の振る舞いはPROの存在を支持する事実として挙げるができるであろう。

6. このように上の構文をすべて、同一の規則で説明できる可能性がある。しかしながら、本稿で対象にしている構文がほかのものやや違っているのではないかと思わせる性質がひとつある。Quirk et al. (1972: 877)によれば、完了の*having*形は、主要名詞が不定(*indefinite*)の場合以外は普通ではないとのことである。こういう制限は関係詞節では見られない。

- (38) a. Any man *having* witnessed the attack is under suspicion.
- b. ?\*The girl *having* won the race is my sister.
- c. The girl who has won the race is my sister.

もっともQuirk et al. (1985: 1264)によるとやや違っ

たニュアンスで述べられている。*having*形は通例使われないが、主要名詞が不定のときは容認可能になるとして、次のような判断をしている。

- (39) a. ?\*The man *having* won the race is my brother
- b. ? Any person or persons *having* witnessed the attack is under suspicion.

実例にあたっていくと、*having*形だけではなくただの*ing*形でも圧倒的に主要部の名詞は不定のことが多い。そして一般論の文脈で使われることが多いのである。どこで述べられていたか失念したが、役所の文書等で使われることが多いそうである。ただし名詞が定(*definite*)の例がない訳ではない。

- (40) a. It should also be appreciated that no review such as this one can claim to be anywhere near exhaustive in its coverage: *the numerous journals reporting* a vast array of psycholinguistic experiments are packed with confusing and very often conflicting results, open to a host of different interpretations.

(Hall, *Morphology and mind*)

- b. Most commonly the phrases had the identical heads and *the relation of hyponymy existing* between them was created through the process of "syntagmatic modification",...

(Meyer, *Apposition in contemporary English*)

それに対してカンマの後に続く、いわば非制限的用法の時には定名詞句でよい。

- (41) a. I will discuss some of the most important challenges to *the theory*, including the serious one of how one can know what the cases are and how many of them there are;...

(Ravin, *Lexical semantics*)

- b. *William, not having heard the dinner gong, did not eat last night.*  
(Celce-Murcia and Larsen-Freeman,  
*The grammar book*)

また後置修飾のVen等についてもこのような制限がない。

- (42) a. *The door most frequently used for familiar comings and goings at Charne was at the west front.* (Haan (1989: 73))  
b. *The house restored by the Johnsons is quite unusual.*

なぜなのであろうか。この事実についてはもう少し詳しく調べて、検討する必要があるが、このことは、(1)の例と(5)の例を別々の規則で説明したほうがよい可能性を残すだろう。(5)は従来のように関係詞節縮約規則によって説明をし、(1)は(17)の構造によって説明をする。この不定性の問題についてはさらに別の所で検討をしてみたいと思う。

7. 本稿では名詞の後置修飾表現について事実の検討をして、従来関係詞節縮約規則で説明されていたものも含め小節を用いて、ひとつの規則で説明する提案をした。

#### 参考文献

- Comrie, B. 1989. *Language universals and linguistic typology*. 2nd ed. Oxford: Basil Blackwell.
- Haan, P. de 1989. *Postmodifying clauses in the English noun phrase*. Amsterdam: Rodopi.
- 原口庄輔・鷺尾龍一. 1988. 『変形』(現代の英文法, 11) 東京: 研究社.
- 井上和子・山田 洋・河野 武・成田 一. 1985. 『名詞』(現代の英文法, 6) 東京: 研究社.
- 宮下真二. 1985. 『英語はどういう言語か』東京: 季節社.
- 長原幸雄. 1990. 『関係節』(新英文法選書, 8) 東京: 大修館書店.
- Quirk, R.; Greenbaum, S.; Leech, G.; and Svartvik, J. 1972. *A grammar of contemporary English*. London: Longman.
- 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- 山本英樹. 1992. 「バーナード・コムリー(現代言語学の旗手たち 19)」『言語』7月号, 104-11.
- Yoshimi, K. 1989. *Understanding of noun phrases with postpositive modifier: In case of past participle*. *Leo* 18. 59-75. (東京学芸大学大学院英語研究会)